

ハッピー赤ワイン

小長谷 正明

小学校五年生の初夏のある日、家に警察の人がやってきた。私服だったが、「えーっ、そんな馬鹿な。でも、警察がいうんだから確かなのでしょな」という父の受け答えがわかった。しばらく話し込み、なにやら書類に判を押してから、父は僕にもついてくるようにいって車に乗った。着いた先は警察署でも刑務所でもなく、うちの所有地の原っぱである。みると、四畳半ぐらいの広さに大人の背丈ほどの真っ直ぐな草がびっしりと生え、上のほうにはでな赤い花が咲いていた。

「ほれ、この図鑑の絵と同じでしょう。この坊主のところの茎を折ると、ほら、白い汁が出る。これを煮詰めるとヤクですよ」と警官がいった。ケシの草むらだといふのだ。自生だか誰かが植えたの

かは不明だが、少なくともこちらには寝耳に水だった。「全部、引っこ抜いてください。焼却処分ですから」。二人して僕を振り向き、僕に抜けという。破壊本能が盛んな十歳前後だったので、片っ端から引き抜いた。たいして根も張っていないので子どもでも造作なかったが、小さなひこばえまで徹底的に抜かされた。

二〇分ぐらいですべて抜き終わると、今度は一カ所に集めて火をつけた。生の草なので燃え上がり、白い煙がもうもうと立ち上り、警察の人は僕に煙を吸わないようにと注意した。が、それは無理。風向きが変わって、いがらっぽい煙でむせ込んだが、しばらくの間甘みのないヌガーを口に含んだような、まだるっこくて蕩けるような気分が続いたことを覚えている。

風邪をひいて薬を飲んだ時のようだった。翌朝、その気分がまったく失せていて、ちよっとばかり残念だった。

昭和三十年代では、まだ観賞用にケシが栽培されていた。きつと、誰かがボウボウの草むらよりはと植えたのか、あるいはこぼれ種から生えてきたのだろう。料理にも使っていたらしい。が、その頃NHKラジオで時々ケシ栽培に関わるニュースを流していたし、警察も本格的に取り締まりを始めたようだった。

次の年、また警察が来た。昨年のこぼれ種から生えたようだとのこと、また僕にケシ刈りの動員がきた。ほんの一〇本、二〇本というところだったと思う。今度はその場で焼却処分をせずに、警察のトラックが運んでいった。後で知ったことだが、中国やロンドンにあった阿片窟では煙を吸っていたという。だから、幼い頃に僕はケシ栽培取締警官の指示の結果による煙吸引で、麻薬体験をしてしまったのかもしれない。もちろん、この頃は、内因性の麻薬様物質、

オピオイドペプチドのことなどは知らなかったし、学問の世界でもわかっていなかった。

幸いにも麻薬常習者にならなかった。モルヒネやコカイン、大麻に覚せい剤などは縁のない人生を送ってきた。が、人並みにタバコと酒には無縁ではなかった。もっとも、前者のほうは二〇年前の一念発起で縁を切れたが、アルコールはずっと人生の一部のままである。

蘊蓄を傾けられるほどにはいろいろな酒を飲んだわけではないが、赤ワインには独特の作用があるようだ。こちらの気持ちを含み込んでまろやかにし、満ち足りた気分になさしてくれる。父の遺品にあつた二〇年ものトカイワインは当然のこととして、安物の赤ワインですら、グラスを傾けてしばらくするとポワーンとして、ほのかなオイフォリアの海に心が漂いはじめ。ちよっと心が疲れた時などに杯を重ねて飲むと、ぐったりといい気分、もろもろの憂きこと

だ。ほかの酒では、白ワインでもこれまでのことはない。

赤ワインのこんな作用に気がついていたのは、かなり大人になってからである。それまでも結婚式の披露宴などで口にすることはあつたが、次々と注がれるいろいろな飲み物や人との会話で、ゆつくりと味わつたことはなかつた。それに開けてすぐの独特の渋みで、美味いと思つたことはないし、かすかに吐き気がすることもある。なんでこんなものを人は飲むのだろうと思つていた。デカンティングで酸素を加えることにより渋みが飛んで、味がまろやかになることはいぶ後になって知つた。

不惑の頃は人生の曲がり角に差ししかつて、惑々ランドのような毎日となり、心が重かつたある晩、テーブルの上でワイングラスの底を回転させながら、友人といつまでもくどくどと話していたが、深刻さに話が途切れ、グラスを口に運んだ。すると渋みが消えて味が深くなつていて、口当たりも変わつていた。ああ、これが、キリストの血かと思つた。なん口か飲んで

でいるうちに、ブルーであるはずの心もいくらか赤みを帯び、なんとかなるさ、今がどん底、なせばなるさと自信が湧き、やがてイージーな話題へと流れていった。

赤ワインには単なるエタノール以外の薬理作用があるようだ。リン酸コデインを服薬後の感じと似ていなくもない。鎮咳薬だが、正式にはメチルモルヒネ、弱い麻薬でもある。だから、かつてターミナル・ケアの疼痛緩和に使われていたブロンプトン・カクテルのベースに赤ワインが使われたのは、単なる色づけ味つけの意味以上の理由があるのかもしれない。どうもそのようだ。

○ 「自分で自分をほめてあげたい」とは、女子マラソンの有森裕子選手がバルセロナ・オリンピックで銀メダルを勝ち取った時の名セリフだが、脳の中には報酬系と呼ばれる、自分で自分をほめてあげるシステムがある。非常な努力をして何かを成し遂げた時には、脳内にある側坐核や前頭前野、中脳腹側被蓋などからなるシステム回路

が興奮の渦でスパイラル状態に盛り上がり、脳の麻薬様物質、エンドルフィンなどもたくさん分泌されるといわれている。

世の中には次々と新しい目標を決めては征服する人がおり、登山はもとよりスポーツでも勉強でも、はたからみていると大変な努力のように見えるが、本人は楽しむようにして難関にチャレンジしてこなししていく。楽器や語学のマスターでもそうだし、僕の友だちの中には五十歳代半ばにしても嬉々として論文を量産している人もいる。このような、チャレンジ精神に富み、創造性に溢れている人の脳の中では報酬系がすぐに反応するようになつており、次々と達成感に浸りやすくなつていくに違いない。何かよいことがあると報酬系は興奮する。美味しいものを食べた時、美人を目にした時、大三元字一色を積つた時、中日ドラゴンズが勝つた時などは、最終的に快感の中核である側坐核が刺激されてハッピーになる。もちろんセックスもそうに違いない。そのような時、側坐核ではフェニールエチル

アミン (PEA: phenylethylamine) という物質が増加し、これが脳内麻薬のエンドルフィンを分泌させてハッピー感覚を催すという。

PEAの化学構造は、亀の甲のベンゼン環に炭素二個の鎖が出ていて、その先にアミン基がついているだけで、この手の物質としてはシンプルなものだ。亀の甲にアルコール基を二つつければドパミンであり、快感にも関係する神経伝達物質だ。それだけではなく、覚せい剤のアンフェタミンや幻覚物質のメスカリンとよく似ている。アンフェタミンはPEAの炭素鎖にメチル基がついただけであり、メスカリンはPEAの亀の甲にメタノール基が三つだ。つまり、PEAは内因性の快感物質なのだが、分解されるのが早いので本物の覚せい剤のように後に引かないのだろう。分解速度が速いということ、幸福の絶頂が長くは続かないということも意味している。

○ 実は、赤ワインにはPEAが大量に含まれており、リンコデと似たような感じがするのは側坐核が

ストレートに刺激されるからだ。だから、赤ワインを飲むと気分がほんわかとしてきて、なぜか満ち足りた気分になるのだ。赤ワインはパッカスに似合う。その年の新作、ボジョレ・ヌーヴォーを言祝ことばぎながら飲むことが日本でも定番しつつあるのは、社会が円やかになつてきていることを表しているのかもしれない。どこかの国もこれを愛でるようになれば、エキサイタリアティが下がって、四海に春風が生じていいのになと思わなでもない。人でもそうだ。

チョコレートもPEAを多く含んでいる。チョコレートをかじると心が軽くなるし、すぐにまた食べたくなるような習慣性もある。ヴァレンタイン・デーにチョコレートは宜なるかなだ。もっとも、相手によつては季節に関係なく何をプレゼントされてもウエルカムなのはいうまでもない。

しかし、赤ワインはいいことづくめでもなさそうだ。飲み方次第によつては悪酔いしそうな気がする。速いピッチで飲むと吐き気がする。チョコレートも然りだ。神

経伝達物質であるPEAの血中濃度が急速に上がり、防御反応が起こってくるのだらう。化学調味料が多すぎると、神経伝達物質のグルタミン酸の過剰摂取にならないように吐き気がするのと同じだ。それにしても、赤ワインを飲むと飛行機酔いするのはなぜだろう？

中学か高校の同窓会の流れでテーブルを囲み赤ワインが出たところ、昔美少女の一人が私はダメだという。側坐核のPEAが減少加減になりながら聞くと、頭痛が起ころという。なるほど、赤ワインはブルーチーズやチョコレートと同じく片頭痛を誘発する。PEAだけでなく、いろいろなアミン類が高濃度に含まれており、脳の血管の緊張に影響を与えて発作の引き金となるのだ。白ワインにはこのようなことはない。おそらく、ブドウの皮のまま醸造することがさまざまな化学物質を造り出し、赤ワインの複雑な風味と同時にいろいろな薬理作用を醸し出すのだらう。

赤ワインを調べていてフェニールエチルアミンの文字に辿り着い

たその時、無味乾燥な化学物質名にもかかわらず、ある種の懐かしさが込み上げてきた。フェニールエタノールアミン・N・メチルトランスフェラーゼ(PNMT)という、寿命無期限無のような言葉が自然に心の中に浮かんできた。若い日に、必死になって取り組んでいた学位研究の実験で、むんずとつき合つた酵素だ。

まだ高速液体クロマトグラフィがない時代だったので、実験動物の脳内ノルアドレナリンをPNMTを利用して測定法で定量することにした。PEA類似のドパミンのエチル鎖がエタノール化したものがノルアドレナリンであり、PNMTはこれをアドレナリンへと代謝する。ところが市販のものはとても高価であり、乏しい研究予算では買えない。仕方なく、自分でPNMTを精製することにした。材料は副腎、それも大量にいる。

屠場の獣医さんに相談して、ウシの副腎を摘出してもらった。生化学の教室で教えてもらいながら、塩斥と高速遠沈を繰り返して一夏かけて精製し、今度はそれを使っ

て測定法を開発していった。毎日相手にするのは試験管とアイソトープ、それにネズミであり、臨床の教室の大学院生でありながら、やっていることは基礎医学のテクニシヤンのようなものだった。その時期の僕は、ヒトの病気のことよりはネズミの症状のほうが詳しくかつたに違いない。淡々と試験管を振り続けながら、何か月もトライ・アンド・エラーを繰り返し、やつと真冬の一週間ほどの深夜までぶつ続けの実験で思うようなデータが得られた。シンチレーション・カウンターの打ち出す数字をみながら、喜びがジワッとと込み上げてきたことを今も思い出す。

振り返ってみると、マイナー・ノイエスにしかすぎなかったのだが、その時は世界が開けていくような気がした。フェニールエタノールアミン・N・メチルトランスフェラーゼのおかげで、僕の脳の側坐核はフェニールエチルアミンで満たされたに違いない。しかし、その時の祝杯が赤ワインであったかまでは覚えていない。

(国立病院機構鈴鹿病院院長)